

太宰府

1994
8.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の

文化財

(111)

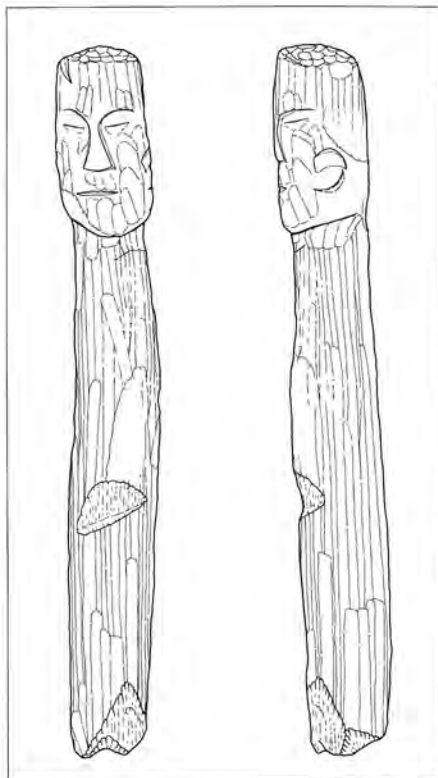
木製人形

長さ24センチ 直径2・5センチ

平安時代 都府楼南出土

写真のこけしのような物は、都府楼南のシルバー人材センターが建っている所から2年前に出土しました。平安時代の溝の中に埋まった状態で見つかったこの人形は、どのような性格のものかはつきりしませんが、次のようなことが考えられています。これは病気や災害の身代りとして使われた人形ではないかというもの

です。病気や穢のある人がこの人形に自分の病気や穢を移して、その人形を川や海に流したり、損壊して棄てることによつて病魔を祓おうとしたのです。それは雛祭りの古い姿である流し雛の風習や、6・12月の末日に神社で行われている晦日の大祓に紙の人形で体を撫でて無病息災を願ひ、罪・穢を祓う行事に残っています。



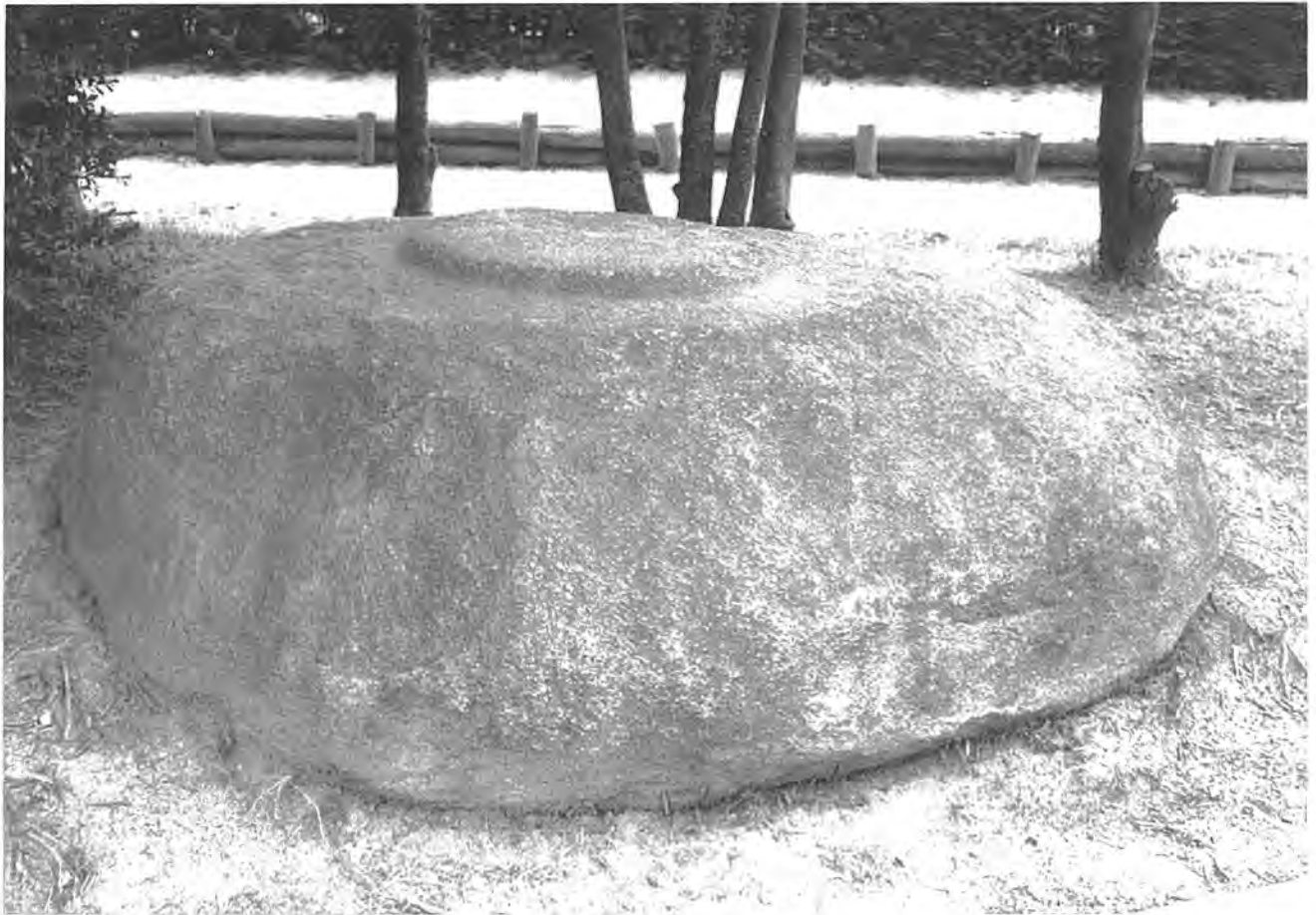
ます。また丑の時参などで知られる詣にも使われました。その人形は神や霊魂が依る所として、神態を演じ、呪力を發揮させるために振ったり、操りが行われるようになります。そしてそれを専門にする集団もでき、傀儡と呼ばれるようになります。傀儡は人のたくさん集まる所や、家々を回つて操人形で悪魔払いの祝福芸を行い、同時に娯

楽芸能なども見せました。それが江戸時代になると宗教性が薄れ、現在に続く人形浄瑠璃になつていくのです。説明が長くなりましたが、写真の人形は、本来的な身代り用の人形だったのか、そういう呪術的な要素を持ちつつも、少しずつ芸能的要素が強くなつていく傀儡の人形だったのか、一文字に結んだ口はなかなか教えてくれそうにもありません。

太宰府

1994
9.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



太宰府の文化財 ①12

推定大宰府庁正門礎石

大宰府政庁前御笠川河床出土

大宰府政庁跡（都府楼跡）の駐車場の植込みの下に、大きな石がひっそりとあります。縦横いずれも2m近いという巨大な石です。上部には円形の浮彫りがあります。この巨大な石は昭和57年12月に政庁前の御笠川の中から掘り出されました。このころ観世音寺地区の区画整理が行われていて、その一環として御笠川も改修工事が行われていたのです。見つかった場所は政庁南門から南へ約220mの所で、ちょうど政庁の真ん中の線の延長上でした。それは現在、朱雀大橋が架かっている所の下あたりになります。

では、この石は一体何なのでしょう。まず上部の円形の浮彫りは、そこに柱が立つことを表しています。つまりこの石は何か建物の礎石だったということが分かります。では、これだけ巨大な礎石を持つ建物とは何か。礎石が発見された場所から考えると、大宰府の役所地区（府庁）の正門、すなわち都でいえば朱雀門に当たる門、その礎石ではないかと推定されています。

御笠川に削られて、この礎石以外は跡が残っていませんが、現在までの大宰府の発掘調査の結果などから考えても、この辺りに門が建っていたことは十分考えられることだと言われています。

あまり気に留める人もいない石ですが、実は貴重なものなのです。

太宰府

1994
10.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

113

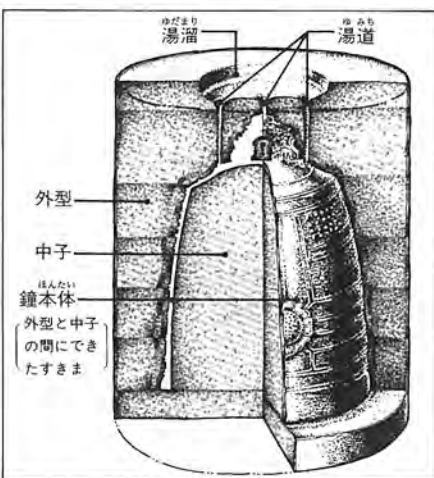
銚ノ浦^{ほこ}鑄造遺跡

時代 13世紀後半～14世紀後半
場所 五条四丁目



西鉄五条駅から太宰府駅の方へ少し行った線路沿い右側で、この遺跡は見つけられました。現在はアパートが建ってしまいましたが、ここは全国でもまだ発見例の少ない中世鎌倉時代ごろの鑄造遺跡つまり鑄物工場の跡でした。

写真①は、鑄物を造るための鑄型を据える穴や、銅や鉄を溶かすための溶鉱炉の跡です。銚ノ浦ではどんな物が造られたでしょうか。鑄物は鑄造後、鑄型を崩して製品を取り出すので、何が造られたか分かりにくいところもありますが、出土鑄型片から確定できる製品をあげてみます。



「鑄物の文化史」(石野享・文、稲川弘明・図/絵)から転載

まず代表的なものに梵鐘^{ぼんしょう}つまりお寺の鐘があります。梵鐘の口縁部の駒爪^{こまづめ}と呼ばれる部分の鑄型(写真②)や、鐘を撞^つく木が当たる撞座^{つづきざ}、鐘をつるすための竜頭^{りゅうとう}、銘文を入れるための文字の鑄型などが出土しています。

ほかに小型仏像の頭部、仏像の光背、台座、そして神社やお寺の軒につるす釣籠^{つりかご}の鑄型片も見つかっています。

また以上のような宗教関係の物ばかりでなく、鍋の鑄型もあり、生活用具も造っていたことが分かります。鍋の大きさは鑄型片から考えると、口径30cmから90cmまでのサイズがあったようです。

銚ノ浦遺跡には炉跡や鑄造用の穴ばかりでなく、作業場や住まいと思われる建物跡もかなりあり、ここは一時的あるいは仮設的な工場ではなく、ある期間続いた鑄物工場であったと考えられています。

市内にはほかに小規模な鑄物工房が発掘されており、仏教関係の製品を中心に化粧道具、生活用品など多様なものが鑄造されたことが分かります。

太宰府

1994
11.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



写真提供…九州歴史資料館(①・②・④)

太宰府の文化財

114

井戸跡

奈良時代～室町時代

水の有難さをつくづく思うこのごろですが、昔の人も水を確保するために苦心したことでしょう。初めは泉や川などの水を利用したのですが、人口の増加やそれらの水を確保しにくい所では、人工的に地面を掘って地下水を利用するようになります。紀元前2500年から2000年に栄えたインド・インダス文明のモヘンジョ・ダロでもすでに井戸があったことが遺跡から分かりました。日本では弥生時代の遺跡から見つかります。

太宰府市内でもたくさん井戸が遺跡の発掘調査で見つかりますが、写真はその中から形や材質の違うものを4種類取りあげてみました。写真①は蔵司の県道を挟んで前面に広がる役所域から出土した奈良時代の井戸です。井戸枠は木の板で四角形に造っています。

②の井戸枠は桶を積み重ねたような構造になっており、太宰府ではこの形態が一番多く見られます。この井戸は学校跡の東辺部で出土し、鎌倉時代ごろのものと考えられています。

③は瓦を積んで井戸枠にしたもので、時代は10世紀、平安時代、出土場所は筑陽高校の西隣りでした。この形態は珍しく、太宰府でも3〜4基しか見つかっていません。

④は人頭大の花崗岩を積んだ石組みの井戸です。石組み自体はかなり古くからあると思われるのですが、この井戸は室町時代のもので、出土地は観世音寺公民館向かい側の学校跡です。

ほかに、材質は同じ木製ですが、四角の枠と円筒の枠を組み合わせたもの、石組と木枠の組み合わせなどもあります。

太宰府

1994
12.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

115

井戸の祭祀

今月も井戸や水にこだわってみたいと思います。

写真①は陽物つまり男根を表現したものです。長さ15センチ、径3・2センチで、樹皮が付いたままの広葉樹を加工して作っています。基部には紐を掛けるためかと思われる削り込みがあります。

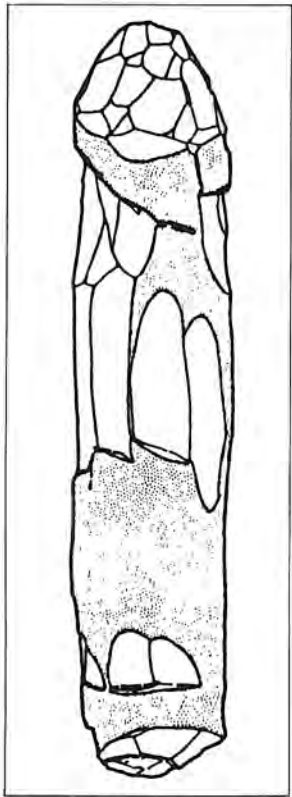
これは蔵司から県道を越えて南へ200メートルくらいの所から出土した奈良時代の溝の中から見つかりました。これら陽物の用途については、近年各地の出土例から井戸や水に関係する

祭祀に使われたのではないかと考えられています。それは、井戸は穴、つまり陰一女とし、そこに陽一男根を吊り下げることによって水が涸れないように、まじないとしたのです。

榎社近くの発掘調査では、井戸の中心から見つかっています。

写真②は逆に井戸を埋めてしまうときの祀りです。

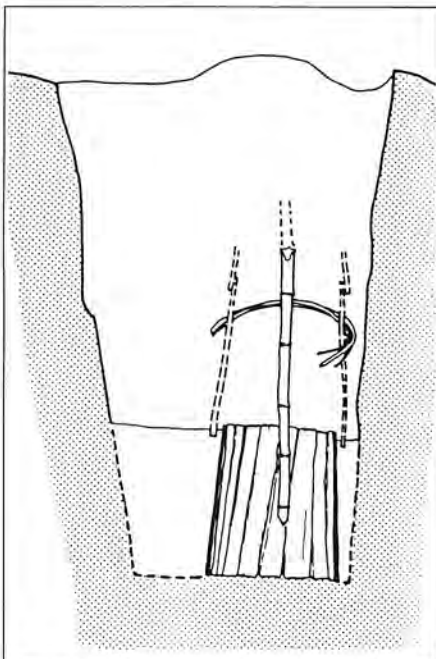
井戸の底に節を打ち抜いた竹を突き刺しています。これは、使っていた井戸を水が涸れたとか何らかの理由で廃棄し、埋めてしまうとき、井戸の神様、



九州歴史資料館刊「太宰府史跡 昭和56年度調査概報」から転載



① (写真提供：九州歴史資料館)



九州歴史資料館刊「太宰府史跡 平成元年度 調査概報」から転載



② (写真提供：九州歴史資料館)

水神様に対するお祀りの形だと言われています。護符を埋めたものなどもあります。井戸の神様に対する感謝と畏敬の念の表われでしょう。このように昔の人々は水の大切

さをひしひしと感じ、その水が絶えることがないように神に祈り、また、役目を終えた水源は丁寧に感謝の祈りをささげて廃棄したのだと思われまます。

太宰府

1995
1.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



太宰府の文化財 ①16

中国陶磁器

平安時代末～室町時代
太宰府市内出土

現代の私たちは、日々、暮らしの中で陶磁の食器を使い、それを特別のこととは意識していません。しかしその使用が日本各地の庶民にまで普及するのは江戸時代になってのことで、意外に新しいことなのです。ただ太宰府では平安時代の終わりごろから、かなりの量の中国製の輸入陶磁器が入って来たよう、写真のような器物が数多く見つかります。つまり太宰府ではそのころから陶磁器がかなり普及したのではないかと考えられています。ところで陶磁器と一言でいっていますが、陶器と磁器とは区別があります。

一般的な概念ですが、陶器は粘土を原料とし、釉がかければ、あまり高い温度で焼かないため、素地はやや軟質です。

一方磁器は石英や長石などの鉱物を多く含んだ磁土に釉をかけ、1200度以上の高温で焼くため、素地は硬く焼き締められ、ガラス化して、たたくとチンチンと涼やかな音がします。

写真では手前に置かれた碗や皿が青磁や白磁で、後方の壺や鉢は陶器になります。

青磁は青色の釉をかけ、白磁は白色の純度の高い磁土に無色透明の釉をかけて高温で焼きます。青磁は名のごとく青色と思われがちですが、初期のころの青磁は黄緑色ですし、また貿易品は大量生産のため質が劣るものも多く、青くない青磁がかなりありました。しかし日本では青磁も白磁も江戸時代初期、有田を中心とする肥前地方で焼き始めるまで国内では作れなかったため、中国からの輸入陶磁器は貴重でした。

太宰府

1995
2.1

■毎月2回／1・15日発行 ■編集／福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

117

げんこう 元亨三年銘の木札

長さ33・2センチ

幅4・0センチ

鎌倉時代

観世音寺参道横出土

観世音寺の参道東側の発掘調査現場から見つかった約670年前の木札です。この札には墨で文字が書かれています。それからは次のようなことが想像されます。

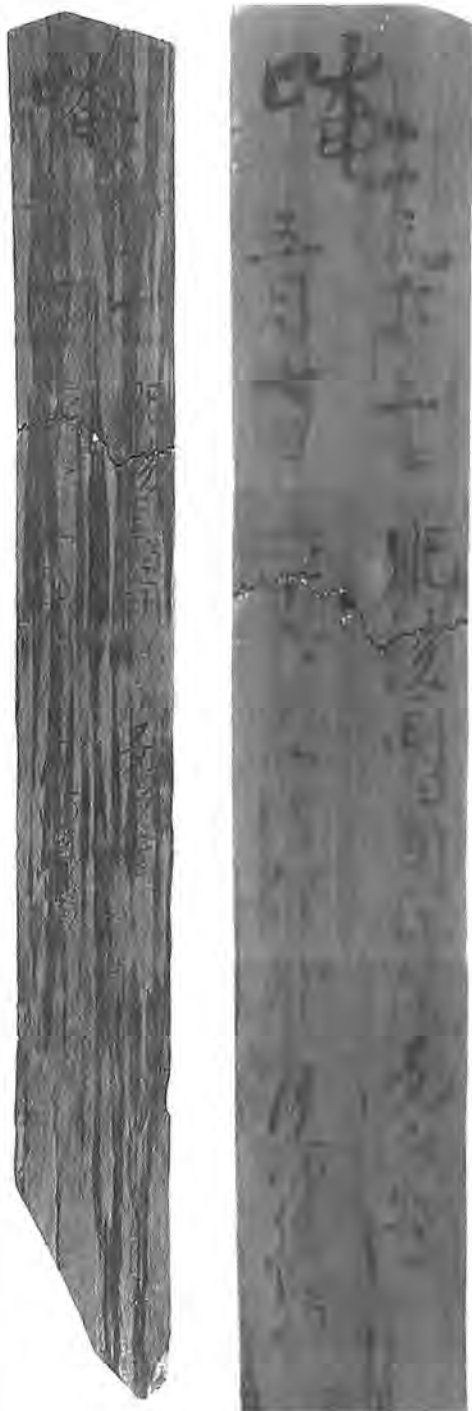
肥後国白間野庄西光寺の写経聖月阿弥陀仏が法華経を六十六部写経し、元亨三年（一一三三）五月七日に一部を観世音寺に奉納した、その時立てた木札と思われま

もう少し詳しく説明しますと、白間野庄は玉名郡白間荘で現在の熊本県玉名郡南関町にあたります。西光寺はもう今はないお寺ですが、江戸時代中期に編纂された『肥後国史』に載る白間庄田原村所在の天台宗の西光寺ではないかと考えられています。

教団の僧や民間宗教家に多く、月阿弥陀仏がどのような信仰をもつ聖だったか推測する上で示唆的です。また、月阿弥陀仏が法華経を奉納した観世音寺は当時66カ所の一つになっていたのでしょうか。鎌倉時代末の観世音寺が民間信仰によっても支えられていたことが想像されます。

庵

元亨三年 肥後国白間野庄西光寺
五月七日 六十六部写経聖月阿弥陀仏



(赤外線テレビによる)

太宰府

1995
4.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

119

岩屋磨崖石塔群(2)

南北朝時代
四王寺山中腹

前月号で紹介した石塔群から少し右へ行くと岩に、直径97センチの円(月輪)の中に「孔」と彫られた梵字仏があります(写真①)。胎蔵界大日如来を表しています。

その横には、高さ62センチ、幅30センチの塔姿形の枠が彫られ、その中に「康永二年癸未 月日」願主圓口敬白」と刻まれています(写真②)。康永二年は南北朝時代の1343年です。

以上が登山道東側の磨崖石塔群ですが、四王寺山にはもう一カ所見つかっています。それはもう一度登山道に戻って、上に登って行くと、まもなく登山道から左つまり西側へ入る道があります。そこを少し入った斜面の岩です。

高さ130センチの磨崖宝塔と線刻の五輪塔、そして一字ずつ月輪に納められた梵字が8個見られます(写真③・拓本)。

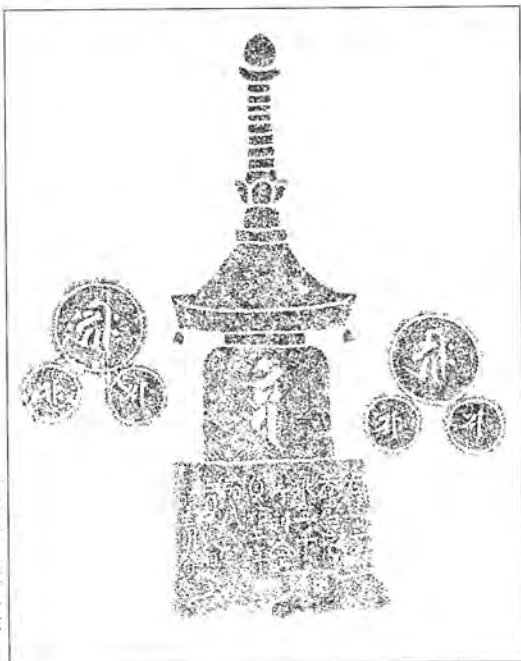
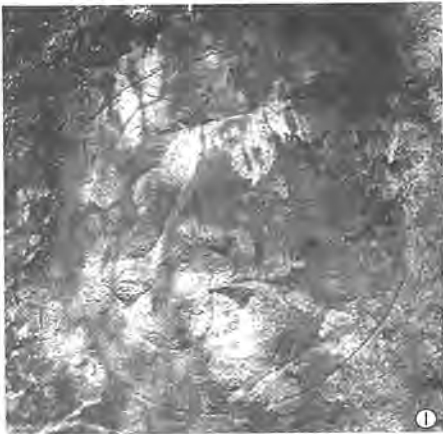
宝塔には金剛界大日如来の梵字「**ぎ**」と「右造立」者為「衆生平」等利益「真和二年」丙戌三月十八日「願主明春」の銘が刻まれています。8個の梵字は宝塔の左右に「**飛**」阿弥陀如来、「**レ**」観音菩薩、「**飛**」勢至菩薩の阿弥陀三尊が、そしてその上方に地藏菩薩の「**レ**」と、はつきり判読できないがもう一つ梵字があります。これらは宝塔を中心に意識的に配されたと考えられますが、線刻の五輪塔は稚拙で後に彫られた可能性が大了。

さてこれら岩屋磨崖石塔群が刻まれたわけは何でしょうか。銘文から推測するに、これらは墓碑ではなく供養塔として彫られたようです。ではなぜこの場所に彫られたか。それは石塔群の麓に位置する観世音寺と関係があるのではないかと。この石塔群に刻ま

れた梵字は密教の影響も感じられ、観世音寺はこの時代、東大寺の末寺であるとともに延暦寺とも関係があったと思われる、延暦寺は天台宗で密教要素も強く、それが関係するのではないかと考えるからです。

石塔の造立は13世紀末から14世紀にかけて全国的に広がったそうで、この石塔群の時期もちょうどそのころにあたります。

また銘に刻まれた年号は北朝、幕府方が使っていた年号で、そのころの大宰府を考える上で一つの参考になります。



(小西信二氏提供)

太宰府

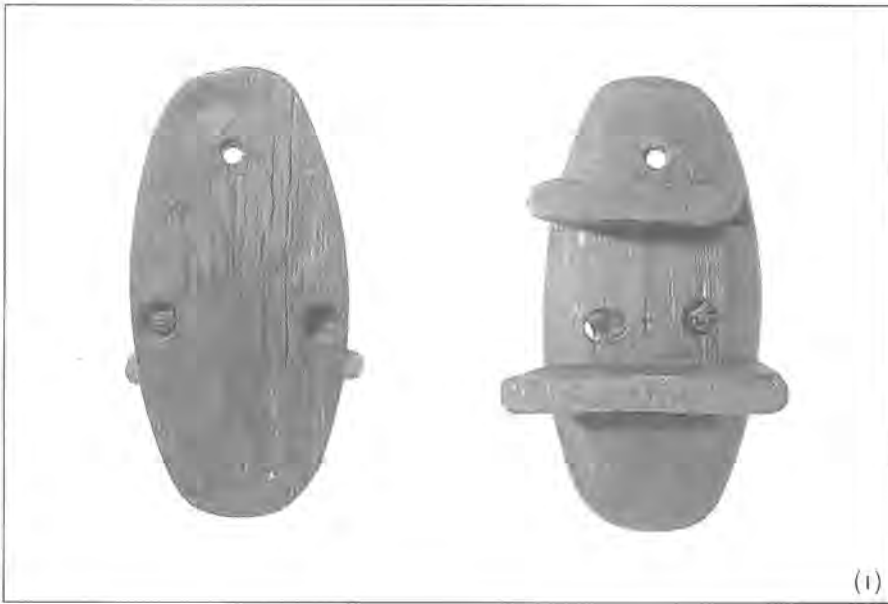
1995
5.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

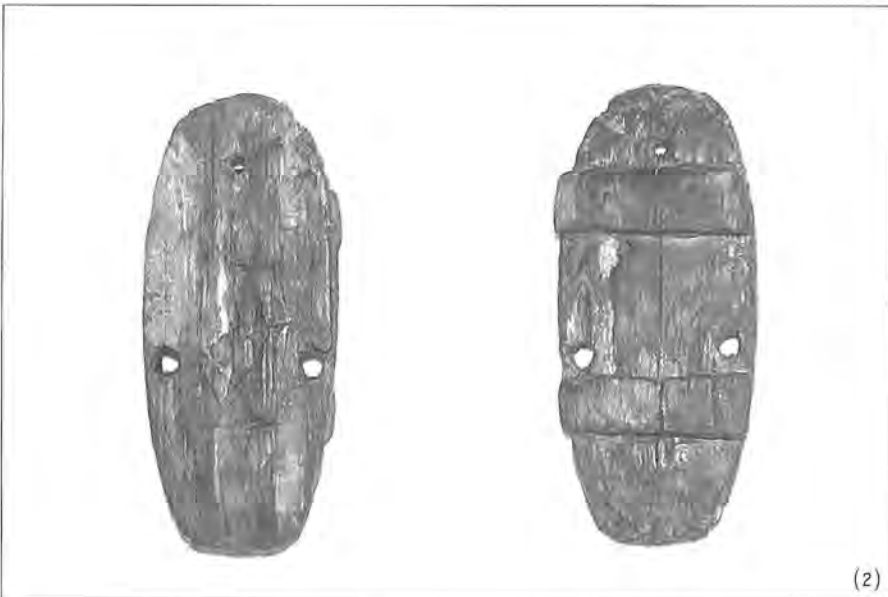
太宰府の文化財 ⑫

下駄

- (1) 室町時代 観世音寺前面域出土
- (2) 室町時代 西鉄五条駅出土



(1)



(2)

「カラン、コロン、カラン、カラン、コロン」
今ではテレビでおなじみのゲゲの鬼太郎くらいしか下駄を愛用していませんが、昭和30年代ごろまでは下駄屋さんなどあって、下駄はかなり身近な存在でした。

下駄が広く普及したのは江戸時代以後ですが、利用の歴史は古くからあります。まず弥生時代には、田下駄と呼ばれる、足がもぐり込まないように深田で使う履物があります。いわゆる下駄の範疇に入らないかもしれませんが、下駄の発生を考える上では重要なものです。

古墳時代からは今の下駄とほとんど変わらない形の遺品が見つかります。写真は市内の発掘調査現場から出土した下駄で、写真(1)は歯を別に作りそれを台に差し込んだ差歯下駄、(2)は歯と台を一本から削って作る連歯下駄に分類されるものです。

鎌倉時代などに描かれた絵巻物には、そのころの下駄の興味深い使用例が見えます。例えば井戸や川のそばで洗濯や水仕事をしている女性が高下駄をはいています。また路傍で排便している人々も高下駄をはいています。汚い場所やぬかるみで、足や着物が汚れないためのものだったのでしょう。ほかには旅姿の僧侶がはいています。下駄は長旅には不向きと思われませんが、琵琶法師や警女もはいています。これらのことから、晴雨兼用という実用面ばかりでなく、下駄にはもう少し別の、常とは異なる状態、例えば宗教的な状況に繋がる面があったのではないかと感じられるのですが……。

(写真提供…九州歴史資料館)